

forget-me-not 考; 文法化の観点から

A Study of ‘forget-me-not’; from the viewpoint of grammaticalization

阿部幸一 †
Koichi Abe

Abstract: The expression ‘forget-me-not’ remains the structure of English in the past, therefore, it can be said to be a historical heritage of English. By examining its background, we can clarify the historical changes around this expression and other related matters. In addition, we try to explain these changes from the viewpoint of grammaticalization.

0. 初めに

ここで、forget-me-not を題材として選んだのは、「忘れな草」という名詞を表わす言葉としては、現代の英語として理解できるが、文章として「私を忘れないで」ということを表すためには、“Don’t forget me.”と言わなくては行けない。しかし中世の英語では、こういった表現が適格であり、現代英語でも古語として残っていることから、英語の歴史を勉強するのに良い題材だと思い、さらには、こういった表現を通じて英語の歴史そのものを理解するのに十分に役立つだろうと考えたからである。

1)

1.0 英語史

forget-me-not を考察する前に、英語史を幾分おさらいしたいと思う。英語は大きく分けて、古英語(OE)が 700 年～1100 年、中英語(ME)が 1100 年～1500 年、初期近代英語(Early ModE)が 1500 年～1700 年となっていて、現代英語に繋がります。まず、OE を代表する Beowulf の冒頭を見てみよう。

(1) *Hwæt! Wé Gárdena in géardagum*

Lo! we spear-Danes in days of old
þeodcyninȝa þrym ȝefrunon
heard the glory of the tribal kings
hu ða æþelinȝas ellen fremedon
how the princes did courageous deeds
oft scyld scefing sceapena þreatum
Often Scyld Scefing from bands of enemies

(Beowulf 1-4)

上段のイタリック体が原文、下段が現代語訳。見慣れない文字等が多々あり、現代英語とは似ても似つかない言語であることが分かる。ドイツ語に近い印象を与えると思う。²⁾

次に、ME を代表する Chaucer の *Canterbury Tales* の冒頭を見てみよう。

(2) *Whan that Aprill with his shoures soote*

When April with its sweet-smelling showers
The droghte of March hath perced to the roote,
Has pierced the drought of March to the root,
And bathed every veyne in swich licour
And bathed every vein (of the plants) in such liquid
Of which vertu engendred is the flour;
By which power the flower is created;
(Chaucer, *The Canterbury Tales: General Prologue* 1-4)

OE との違いは歴然としていて、かなり現代英語に近くなっていると思われる。幾分フランス語に類似しているように感じられないだろうか。また、現代英語では見られない接続詞の連続である *whan that* が許されている。

(OE から ME への変化は、劇的なもので、まるでドイツ語系言語からフランス系言語に代わったように思われるほどである。これらの変化については、後で記述するスカンジナビア人による侵略とノルマン征服が関与している。)

そして次には、初期近代英語を代表する Shakespeare の *Hamlet* の有名なセリフを見てみよう。

(3) *To be, or not to be, that is the question:*

Whether 'tis nobler in the mind to suffer

† 愛知工業大学 基礎教育センター (豊田市)

*The slings and arrows of outrageous fortune,
Or to take Arms against a Sea of troubles,*
(Shakespeare, Hamlet, Act 3, Scene 1)

劇という特殊な状況で、幾分修辭的なところもあるが、ほとんど現代英語に近い感じがするだろう。言語学的には、16 世紀にほとんど現代英語の原形が完成したと言えるだろう。

以上見てきたように、英語は OE から ME を経て、Early ModE に至るまでに、ものすごい変化が起こったことが分かる。これに関して、統語的及び形態的变化について、Gelderen(2018, p.17)は次のような表にまとめている。

Table 1:

Changes in the syntax and morphology of English

OE: Free word order but often V2 and OV

Case endings on nouns and pronouns

Inflection on V for subject and tense

No articles, only demonstratives

Some omission of subject pronoun

Limited use of auxiliaries and prepositions

Negation before the V

late OE: more 'to' and 'of'

reinforcement with second negative

early ME: OV > VO

...loss of case on nouns...>

...less inflection ...>

articles ...>

pronoun is obligatory ...>

late ME: SV; some V2

many auxiliaries ...>,

negative after the auxiliary...>

early ModE: loss of V2

ここで特筆すべきは ME 期に劇的な変化があったことが分かる。主なものだけでも、語順が OV から VO に変化、名詞における格変化の消失、屈折語尾の消失などが起こったことが分かる。これを理解するためには、英語史を知る必要があると思われる。言語的に重大な影響は、8, 9 世紀におけるスカンジナビア人の侵略と、ノルマン征服(1066 年~14 世紀半ば)と呼ばれるフランス人の英国支配が考えられる。そして、言語変化の要因としては、外圧(外的要因)と内圧(内的要因)の 2 つがあると考えられる。外的要因とは、とりもなおさず、スカンジナビア語やノーマンフレンチの影響が大であるが、これを Trips(2002)は言語接触と呼んでいる。言語接触の最たる例は、スカンジナビア人および(ノルマン征服時代の)フランス人との接触において、言語伝達の障害となる、屈折語尾が単純化していったことが挙げられるだろう。

上の表においては、ME 期に突然、名詞や動詞の屈折語尾が減って来たように見えるが、実際は OE 後期におけるスカンジナビア人との接触から、すでに屈折の単純化が始まっており、ME 期のノルマン征服に伴って、より顕著になったと考えられる。

また語順に関しては、スカンジナビア語の影響で OE 期には、OV 語順に定まったが、ME 期になると、ノーマンフレンチの影響で VO 語順に変化していった。この語順に関しては、後により詳しく考察する。

また ME 期に見られる二重否定は、フランス語の影響と考えられる。

しかし、それだけではなく、英語固有の内的要因もある。例えば、英語は、OE 期にスカンジナビア人の侵略を受けて、北部方言では、V2 語順³⁾が強化されたが、一方南部方言は、それにもかかわらず接語が来た場合には、接語が第 2 位置を占め、動詞は第 3 位置に来了。これは、とりも直さず、英語固有の特質によるものである。次の OE の例を参照。

(4) Ðas word **we** *saedin* hwillon on summon odrum
spelle (These words we said on one occasion is
some other story)

(Alc.P.IX.72)

(5) On da wisan **he** *forgæf* done gylt ðam wife

(In that way he forgave the guilt the-dat. woman =
in that way he forgave the woman her guilt)

(Alc.P.XIII.228)

これらの例では、文頭にある主題の名詞や前置詞の後に、接語である代名詞が来て、その後に動詞が来ている。これらは、明らかに動詞が 2 番目に来るというゲルマン語の特徴である V2 構造に反している。英語が接語を持つという特質は、スカンジナビア人に侵略される以前から持っていて、北部ではスカンジナビア人の影響で、V2 構造が優勢であったが、南部ではスカンジナビア人の影響を受けず、英語本来の構造として、接語が介在する、いわば V3 構造が保持されたという点で、特筆に当たる。

英語は、本来ゲルマン語的な要素を持っていて、一時期スカンジナビア語の影響を受けたが、その後ノルマン征服により、フランス語化したものの、14 世紀半ばになると、その頃にはフランスの支配も弱まり、社会ばかりでなく、言語的にも市民運動が起こり、V2 の消失や do/助動詞の台頭などに見られるように、英語は独自に発展して行ったと考えられる。

2. forget-me-not 考

上では、英語史における英語の特殊性を見てきた。ここでは、主題としての forget-me-not に焦点を絞り、より深く考察したいと思う。⁴⁾

OED によると、この表現は、Old French の *ne*

m'oubliez mye (=ne m'oubliez pas)の翻訳から来たとしてされており、15世紀頃、この花は、これを持っている人は、その恋人によっては決して忘れられないことを保証する美德を持っていると考えられた。また、その名前が示すように、同様の魔術的な特性を持っていると考えられた。初出、1532年頃、Dewes: *Introd. Fr. in Palsgr*, 1024, *A flour of forget me nat, une fleur de ne moubliez mye*

一方、インターネット上の Wikipedia によると、その謂れは中世ドイツで、ある騎士が、岸に咲くこの花を恋人に渡そうとしたところ、川の流りに飲み込まれて、「僕を忘れないで」(独語: *Vergiss mein nicht*) と言って死んだということです。その恋人は、彼の墓にこの花を添えて、彼の最後の言葉を花の名前にしたそうです。

謂れはどうか、言語的に見ると、英語の *forget-me-not* は、その語順からすると、一見ドイツ語から来たように見えるが、中世という時代を考えると、英国はノルマンフレンチの時代は過ぎているものの、まだフランスの影響下にあったので、フランスから伝わったと考えられる。しかし、フランス語流に二重否定にならず、否定語が動詞句の後に来ているというのは、ドイツ語に倣ったというより、その時代の英語の語順が、すでに動詞—目的語—否定語という形に確立していた証拠と思われる。

ここで、*forget-me-not* に関しては、2つの現象が関係していると思われる、1つは、否定語の位置であり、もう1つは語順に関わる問題である。

2.1 否定語の位置

英語の否定の歴史に関しては、Jespersen's Cycle と呼ばれるものが存在する。Fisher et al.(2000, p.305)では、文法化の観点から次のように述べている。

- (6) i. 否定は、1つの否定標識によって現わされる。
(否定語が動詞の前に来る)
- ii. 否定は、否定の副詞又は名詞との結合と共に、否定標識によって現わされる。(二重否定構文、否定が動詞の前後に来る)
- iii. iiの段階における第2要素は、それ自体で否定を現わす機能を持つ、よって、元の否定標識が任意となる。
- iv. 元の否定標識が、絶滅する。(否定語が動詞の後に来る)
- 続いて、(以下追加: 阿部)
- (v. 否定は *do*/助動詞と結びついて、否定語は *do*/助動詞の後で、動詞の前に来る)⁵⁾

文法化の観点からすると、古い形が言語的記号として失われたために、新たな否定の副詞が導入される。一旦、この新しい要素が導入されると、古い形は任意となり、消失された場合には、移動の痕跡理論に基づいて、新しい要素は以前の要素の痕跡と関連づけられると仮定する。

具体例を示すと:

- (7) ① **Neg**...Verb (OE)

Nolde se Hælend for his bene swaþeah hym fram gewitan (not-wanted the Lord for his prayer however him from depart =The lord did not want to leave him because of his prayer)

(ÆHom 15.199)

- ② ... **Neg** ... Verb ... **Neg** (ME)

yet ne wolde he nat answer sodeynly
(yet not wanted he not answer suddenly =
yet he did not want to answer suddenly)

(Chaucer *Melibee* 1032/2222)

- ③ ... (Neg) ... Verb ... **Neg** (Early ModE)

You speak a language that I understand **not**

(Shakespeare, WT.III.ii.77)

- ④ ... *do*/Aux ... **Neg** ... Verb (Late ModE)

I **don't** know where he lives. (現代英語)

Hopper and Traugott(2003)によると、同様の変化がフランス語にも見られると指摘されている。

- (8) i) 否定の *ne* が V の前に起こる。

- ii) 否定語が任意に動詞の後ろに来て、二重否定の形になる。(ne+V+(pas))

Il **ne** va (**pas**).

he not goes (step)

'He doesn't go (a step).'

- iii) 動詞の後ろの否定語 (*pas*) が義務的となる。

(ne+V+pas)

Il ne sait **pas**

he not knows not

- iv) 話し言葉では、動詞の前の *ne* が任意となる。

((ne)+V+pas)

Il sait **pas**.

he knows not

英語と仏語の違いで注意すべきことは、1) 動詞の前に来る否定語(英語、仏語共に *ne*)は、動詞の後ろに来る否定語(英語の *not*、仏語の *pas*)と見られるように、第2要素の否定語は、決して第1要素の否定語のコピーではなく、独自に進化したものと考えられる。2) 仏語の場合には、現時点では、動詞の前の否定語は、任意になっているが、英語の場合には、動詞の前の否定語は、もはや義務的に削除される。その点では、英語の方が進んでいるように見える。

文法化の流れからすると、英語であれ、仏語であれ、

否定語の発達は、動詞の前の否定語(ne)を A、動詞の後の否定語(nat/pas)を B とすると、 $A > A/B > B$ のパターンを示すことから、決して Jespersen の言うような循環ではなく、文法化の一つである、一方向性(unidirectionality)を示していると思われる。ここでいう一方向性とは、Hopper & Traugott(2003)によると、通時的観点から、文法化は一定方向に進む、つまり逆行しないと考えられる。

2.2 動詞句内の語順

英語における動詞と目的語の語順は、Table1 に表されるように、OE 期の OV 語順から、ME の VO 語順にいきなり変化したわけではない。

Pintzak(1993)によると、OE の語順に関して、OV が主流であったけれども、VO 語順も存在していたと記述しているし、また Roberts(1997)によると、中英語初期(950 年頃)では、VO 語順が 27.5% だったのに、950 年以降の OE 期には 48.5% まで増えていったと指摘している。

また、Hopper & Traugott (2003 p.67)では、1000 年から 1500 年までの VO 語順の文法化のデータを列挙している。

Table 2

Grammaticalization of VO word order in English between AD1000 and AD 1500

	c.1000	c.1200	c.1300	c.1400	c. 1500
Accusative object before verb (=OV)	52.5%	52.7%	40+%	14.3%	1.87%
Accusative object after verb (=VO)	47.5%	46.3%	60-%	85.7%	98.13%

Pintzak(1993)や Roberts(1997)の記述及び Hopper & Traugott (2003)の表を合わせると、OE 初期(700 年~950 年)においては、OV 語順が主流であったが、OE 後期から ME 初期(950 年~1200 年)になると、OV 語順と VO 語順が共存し、ME 後期(1300 年~1500 年)になると、VO 語順が優勢になっているのが分かる。

つまり、OV 語順を A とすると、それが隆盛だったのは、OE 初期であり、それに対する VO 語順を B とすると、ME 初期には A と B とが競合するが、ME 後期になると、B が A に代わって、文法化されると仮定される。まさに、この変化は、否定語の変化と同様に、 $A > A/B > B$ のパターンに収まる、つまり、一方向性による文法化と考えられる。

しかし、英語の場合には、さらに進んで do /助動詞の台頭という現象が起こる。これに関して、より具体的な例として、Shakespeare の英語を基にして、さらに考察したいと思う。

3. Shakespeare の英語

ここでは、次の 3 点について、Shakespeare の英語を基に、考察したいと思う。1) 否定語の位置について、2) 動詞と目的語の語順について、3) do /助動詞の台頭に関して。

まず、平叙文における、否定語をめぐる語順を見てみよう。

- (9) a. 'Though you perceive me **not** how I give line'
(Winter's Tale I.ii.181)
b. 'I feel't **not**' (Winter's Tale I.ii.207)
c. 'I love thee **not** a jar o'th'clock behind'
(Winter's Tale I.ii.43)

上に見られる例では、forget-me-not と同様に、動詞—目的語—否定語という語順が守られている。

しかし、次の例では、do が否定語及び動詞の前に来ている。

- (10) 'The grief that does **not** speak' (Mach,IV.iii.209)

これをどう考えるべきか。数としては、動詞—目的語—否定語の方が多いが、多分に韻律的な理由もあり、また、この時代にそろそろ助動詞としての do が台頭しつつあることを示す。

さらに命令文を見て見ると、do を伴わないものが圧倒的であるが、do を伴うものも散見される。次の例は、King Lear からのもの。

- (11) 'Hear it **not**' (II.i.63)
'Be **not** lost' (II.ii.71)
'Fail **not** our feast' (III.i.27)
'regard him **not**' (III.iv.58)
'speak **not**' (III.iv.117, IV.i.89)
'Stand **not**' (III.iv.119)
'Be **not** found here' (IV.ii.68)
'But fear **not** yet' (IV.iii.69)
'Keep it **not** from me' (IV.iii.200)

同じく、King Lear において、do を伴う例がみられるが、数は少ない。

- (12) 'Do **not** bid me speak' (II.iii.70)
'Yet do **not** fear' (IV.iii.87)

加えて、否定疑問文の場合には、do のあるなしに関しては、揺れが見られる。

- (13) 'Do you **not** hope' (Macb.I.iii.118)
'Did **not** you speak' (Macb.II.ii.16)
'Know you **not**' (Macb.I.vii.30)

ここで気付くことは、do を用いた例では、現代英語のように、don't のような縮約形が見られないことである。中村(1993, p.209)によると、don't で始まる否定命令形が

一般化するの、1650~1700年の間と推定されるという指摘があり、また、Blake(1988)によると、Shakespeareの英語では、否定語の縮約形である、n't 自体が見られないとしている。

以上のことから分かることは、Shakespeareの時代(1564年~1616年)には、動詞-目的語と否定語の語順に関しては、doが生じない場合(動詞-目的語-否定語)とdo/助動詞が生じる場合(do/Aux-否定語-動詞-目的語)が共存するが、助動詞のdoの存在はまだ圧倒的ではないため、以前の形である、doが生じない(動詞-目的語-否定語)の語順が好まれたことが分かる。

これを文法化による説明とすると、Aを「動詞-目的語-否定語」の語順、Bを「do/Aux-否定語-動詞-目的語」の語順とすると、 $A > A/B > B$ の型に当てはまり、一方向性の文法化の基準を満たす。英語はやがて、すべてBのパターンを示すようになるが、Shakespeareの時代は、まさにそれが共存する段階であったことを示している。

4. まとめ

この論文では、forget-me-notを題材にして、英語史における、動詞-目的語の語順および否定語の位置を見て来た。そこから分かることは、OE期からME期に見られる、OV語順からVO語順への変化は、一度に変化したのではなく、 $OV > OV/VO > VO$ というように、両方の語順が共存する段階を経て、OV語順からVO語順へと、一方向性に基づく文法化がなされたということである。

同様に、否定語の位置に関しても、否定語-動詞 > (否定語)-動詞-否定語 > 動詞-否定語という一方向性による文法化がなされ、さらにはShakespeareの英語に見られるように、これにdo/Aux-否定語-動詞という語順が加わり、これも一方向性の基準に合っている。この変化を順列化すると、次のようになる。

$neg-V > neg-V / neg-V-neg > (neg)-V-neg / V-neg > V-neg / do/Aux-neg-V > do/Aux-neg-V$

ここでは、最初のneg-Vと最後のdo/Aux-neg-Vは、neg-Vのところだけを見ると、循環的に見えるかもしれないが、1) OEにおける動詞の前に来る否定語は、neであり、一方現代英語の動詞の前に来る否定語はnotであり、ME期においてはnotはneを補強するためのものであったが、初期近代英語期になると、neは消失し、notがneに代わる否定語として確立する点で、両者は別物と考えられる。2) さらに、現代英語では、従来存在しなかった助動詞のdoが否定語の前に来ている。そういう意味で、まったく循環になっていない。そして、neg-VをAとし、neg-V-negをBとし、さらにdo/Aux-neg-VをCと記号化すると、動詞句と否定語の語順は、 $A > A/B > B/C > C$ という、正に一方向性の文法化の変遷を見せている。

注)

1) 文法化の観点からすると、forget-me-notという表現は、動詞句としての'forget me not'が名詞に文法化された例であるが、現代英語では、もはや見られない語順が、いわば凍結した状態として、当時の英語の語順を留めていることに興味を沸く。また、ここでいう文法化とは、whileは、以前は「時間」を表す名詞として用いられていたが、現在では「~の間」を表す接続詞として主に用いられるような、文法的な変化を表す。

2) 現代の英米人が、OEを見たときの印象は、まるで外国語のように感じるように思われる。日本語の場合で考えると、ほぼ同時代の平安時代における源氏物語(1008年初出)や枕草子(1001年頃)の冒頭を見ても、現代の日本人でもある程度理解できるのではないかと思う。

(i) 「いづれの御時にか、女御、更衣あまた候ひ給ひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。」(源氏物語、桐壺)

(ii) 「春はあけぼの。やうやうしろくなりゆく山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲のほそくたなびきたる。」(枕草子、第一段)

私個人の感想としては、現代人にとっては万葉の作品は、中世英語に近い感じではないだろうか。一方、OEはMEやEarly ModEと比べて、語彙だけでなく文構造などもかなり異なる点で、日本人がレ点や助詞等を用いて漢文を理解したように、現代の英米人にとってのOEは、まるでドイツ語のような異国の言語のように思われるに違いない。といっても、英語の祖先であるので、解説さえすれば、ちゃんと理解できるはず。

日本語と英語の変化の一番の違いは、日本には英国に見られるような侵略というような外因がなかったことだろう。日本語は、漢字という中国の文化を借用したが、文法や語彙は、基本的にはそれほど影響を受けなかったと思われる。ただ、その違いは漢字の音訓の違いに見られる。例えば、犬は、(大和言葉として、訓という形で)

「イヌ」と発音され、漢字の借用と共に、(その当時の中国語の発音として、音という形で)「ケン」が導入された。

3) V2と接語について：V2とは、ゲルマン系言語に見られる、主節において、動詞が2番目に来る現象のことであり、接語とは、ロマンス語系言語に見られる、接語(代名詞)が動詞の前に隣接する現象を指す。V2も接語も、共に第2位置に関わることから、発見者に因んで、Wackernagel positionと呼ばれる。

4) この構造を考察する過程で、ネット上で、Lost not forgottenという妙な表現を見つけた。これは、ロックバンドのDream Theaterの曲であり、その訳語としては、「忘れないを失った」となっている。問題は、notの位置であるが、この否定語は、forget-me-notの否定辞のように、notがforget-me全体を否定しているのとは異なり、あくまで否定語はforgottenの方だけを否定しているように思われる。

曲の内容自体は、神と人間との関係について歌われており、かつて、人間は神と同様に不死と考えて、永遠の帝国を築こうとしたが、帝国が滅びるに至り、人間が死すべき存在と悟るといふもの。忘れない(not forgotten)の状況とは、いつも覚えている、つまり永遠を表すと思われる。それを失うということは、永遠でなくなるということの意味し、したがって「忘れないを失った」という意味になると思われる。つまり、人間が死すべき存在であることを示す。その点では、否定語の not は、あくまで forgotten を否定し、lost は not forgotten 全体を目的語として取っている点で、特に統語的な問題ではないことが明らかになった。

5) この論文では、助動詞に関しては、あまり深く触れない。助動詞に関しては、別の稿で触れることになると思う。

参考文献：

- Blake, N. F. (1988) "Negation in Shakespeare," *An Historic Tongue: Studies in English Linguistics in Memory of Barbara Strang*, Routledge, London and New York, p.89-111.
- Fischer, Olga, Ans van Kemenade, Willem Koopman and Wim van der Wurff (2000) *The Syntax of Early English*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Gelderen, Elly van (2018) *Analyzing Syntax through Texts: Old, Middle, and Early Modern English*, Edinburgh University Press.
- Hopper, Paul J. & Elizabeth C. Traugott (2003) *Grammaticalization*, Second Edition, Cambridge University Press, New York.
- Kemenade, Ans van. (1987) *Syntactic Case and Morphological Case in the History of English*, Foris Publications, Dordrecht.
- Nakamura, Fujio (1993) 「否定命令文における助動詞 Do の発達：17-19 世紀書簡からの検証」, Nakao, Amano eds. *助動詞 Do : 起源・発達・機能*, 英潮社, 東京, p. 195-211.
- Pintzuk, Susan (1993) "Verb seconding in Old English: verb movement to Infl," *The Linguistic Review* 10, p. 5-35.
- Roberts, Ian (1997) "Restructuring, head movement and locality," *Linguistic Inquiry* 28, p.423-60.
- Trips, Carola (2002) *From OV to VO in Early Middle English*, John Benjamins Publishing Company, Amsterdam.
- Concordance: Spevack, Marvin (1973) *The Harvard Concordance to Shakespeare*, Georg Olms, Hildesheim.

(受理 令和 3 年 3 月 19 日)